

第2部：パネル・ディスカッション：テーマ「福島・熊本など自然災害や人災を考える」パネラー：柴田師、馬場副住職（真栄寺）、平野前住職（中原寺）司会：有村和夫副会長（浄明寺）馬場副住職は熊本でのボランティア活動の苦労話をされました。前住職は、災害時のお寺の役割などを僧侶とご門徒と一緒に考える事が大事だとコメントされました。

研修会のあと開法会館にて懇親会（40名参加）が行われ、他寺との交流が賑やかに行なわれました。参加者皆様のご協力により無事終了いたしました。合掌（村田 太喜夫 記）



10月の行事報告 October

◆中原寺・天真寺グラウンドゴルフ交流大会開催

平成28年10月11日（火）に恒例の中原寺・天真寺とのグラウンドゴルフ交流大会を開催しました。中原寺から壮年会・婦人会11名、天真寺さんから8名が参加をして日頃の腕を競いました。

結果は、天真寺の大久保潔さんが優勝を果たし、中原寺の河合功さんが2位と活躍をし、2位から5位まで中原寺が入賞を果たしました。今回は3回目の交流大会で、天真寺の坊守さんも参加され、和気あいあいの中で今回の約束を終了しました。合掌（石井 保 記）



◆第28回中原寺文化講演会について

10月29日 山崎製パン企業年金基金会館 講師：末木 文美士 先生（東京大学・国際日本文化研究センター名誉教授）



講演の内容を当日のレジュメに従って記します。

1. 死と死者をめぐる言説

死や死者のテーマではあまり語られてこなかったが、2005～6年頃「千の風になって」の歌が流行ったり、映画「おくりびと」がヒットした頃から語られるようになった。2011年3月の東日本大震災で多くの人命・財産を奪われ、原発事故を含めその後の復興の様々な難しさが露呈するなかで、東北地方の厚い宗教的風土、経済活動の停滞、社会の高齢化が進んだ結果、「終活」が注目され、死ぬことや死んだ後のことを考えざるを得なくなってきた、と語られた。

また、「永眠」という言葉と広島市の被爆慰霊碑の「安らかに眠り下さい」の文言は、未来への希望が感じられないので好きでない、と述べられた。

2. 死者のゆくえ 勝田 至編『日本葬制史』から①行く先は存在しない②別世界③輪廻転生④この世のどこか、の4項を示された。一般庶民では、死者の行方は曖昧で不確かであった。神道に於いても同様で、本居宣長・平田篤胤の著書を引用されたが、後者においてようやく社、祠あるいは墓に居ると記されるようになった。又、柳田国男の、身近にいる祖先神にも触れられた。

3. 仏教における死者のゆくえ ①輪廻では差別の問題とつながる視点から語りられなくなったが、修業の継続という観点からプラスの輪廻を強調された。自利利他をめぐる徳一

（法相宗）と空海の論争の話は興味深かった。②浄土往生と種々の浄土 ③即身成仏・頓証菩提、現世・来世成仏の項では、禅宗の頓悟・遷化・亡僧供養の話は面白かった。

4. 死者と菩薩 田辺元『死の哲学』、上原専禄『死者が裁く』から解説された。田辺は、死者の生者への愛が生者の死者への愛を媒介として常に働き、愛の交差的なる実存協同をして働いてくる、と述べている、と。上原は、戦争等で虐殺された人達は我々を告発しているのだ、と。両者共に、生者は死者とつながりを持ち続けて生きていくと、当時としては先駆的な数少ない考え方であった、と説かれた。

5. 往相・還相構造と悟り 親鸞聖人『教行信証』、曇鸞大師『往生論注』からの引用文を用いて解説された。往相とは、衆生が阿弥陀仏のはたらきを受け作願して安楽浄土に往生させて頂くすがた。還相とは、菩薩が浄土から回入して、衆生を教化して仏道に導いて下さるすがた。

共に一切衆生を平等に幸せになさろうとする阿弥陀如来のはたらきである、と語られた。私は、関連する本願を含めた教義についての解説があれば、さらによかったのにと考えた。

真宗関係者は、法蔵菩薩以外の菩薩については語りたくないのだ、と指摘し、親鸞聖人は宗派を超える大乘仏教の根本の考え方を説かれていたので、『教行信証』をぜひ読んで欲しい、と講演を締め括られた。（盛田 好一 記）



感話
シリーズ-20

ご旧跡参拝旅行記

「ご旧跡旅行」という言葉は、私の教えもどこへやらとばかりに日々を無為に過ごしている私にとっては何とも重々しく、懺悔の旅の面持ちで初めての参加となりました。

初日の10月16日は今年の日候では珍しい秋日和で、老若男女総勢32名が大型バスに乗り込みました。目的は甲州勝沼町中原の地にあった中原寺の旧跡を訪ねることです。石井幹事の粋なお計らいで、「勝沼ハーブ庭園」に立ち寄り吉本芸人張りの案内で身も心もほぐれていよいよ参詣の始まりです。まずは武田信玄ゆかりの恵林寺で、時の権勢とその後の歴史と文化をたっぷりと感じました。

次は浄土真宗萬福寺で、元は天台宗の寺でしたが、親鸞聖人の甲斐国布教を契機として浄土真宗に改宗して今日に至っているとのこと。井上照淳住職からこのお寺には栄枯盛衰の歴史があり、そこにはお寺とこの地域の住民や門徒の方々の尽力の積み重ねがあることを伺いました。また、お寺には御仏の教えとそれを実践する場としての建物が相互に大切だとのお話が印象に残りました。そのあと近くの三光寺を訪れ、寺を守る難しさも知りました。山門を出ると陽光の中に一面のブドウ畑が広がっていました。

その中、中原寺旧跡を求めて、前住職の記憶と想像力を頼りに走り回ること半時、目印の火の見櫓がやっと見つかったときには、歓声と拍手で沸きました。そして住職が火の見櫓のはしごを垂直に登って「あった、あった、たしかにここだ」と関の声。その櫓は今では記念碑となっていて、ご近所の方のお話では中原寺関係の当時の遺物を町で大切に保管しているとのことでした。

中原寺がその地域で大切な心の拠り所であったことが伺えました。その夜は石和温泉で一泊、翌17日はあいにくの雨模様でしたが、信玄餅工場や富士山世界遺産センターを見学、楽しい二日間でした。

私はこの一泊参拝の旅で多くのことを学びました。その中の一つに亡き母の思い出があります。

私の母は旅に無縁で、たまに出かけた日帰りのお寺参りから帰った日はいつになく優しく「いいお話でした」と何度も口にしていたのを思い出しました。今回の参拝旅行で久しぶりに母に近づけたこと、それによって今までの参拝旅行に対する負の思い込みが解けていったように思います。

合掌

（太田 清史 記）



11月の行事報告 November

◆浄土園「秋の収穫祭」を終えて

11月3日「文化の日」は昨日までの雨もあがり秋晴れの爽やかな朝を迎えました。晩秋の候、中原寺のまわりの木々も黄色く彩りました。浄土園の作物も収穫の時期です。朝9時よりさつま芋と里芋の掘り上げ作業開始です。

最初にさつま芋のつるを切り落とし、掘り起こすと赤いきれ



いな美味しそうなさつま芋が姿をあらわしました。

つぎつぎと掘り出され豊作の様子で、参加者も感激一杯、歓声を上げました。次は里芋です。昨年よりはすこし少なめな出来でしたが、親芋にはかなりの小芋が付いていて親子の姿がなんとも心優しいことでした。

今年は開法会館横の駐車場の畑でもさつま芋を栽培しましたところ、大きなさつま芋が収穫できました。

11時頃から火を起しバーベキューの準備完了。鉄板が熱くなったところでさつま芋、野菜、肉類を焼き、「食前のことば」の唱和では収穫への感謝を実感しました。ビールで乾杯し喉を潤し、皆で出来具合等を語り合いました。壮年会・婦人会の皆さんありがとうございました。合掌（村田 太喜夫 記）